

第27回和解レセプション
林駐英国日本国大使によるご挨拶

令和6年7月12日

ご来賓の皆様、

まず初めに、今晚の第27回和解レセプションにご参加いただいた皆様に、心より歓迎とお礼を申し上げたいと思います。私は日本国大使としてロンドンに赴任して4年目になりますが、毎年、この機会に皆様とお会いし、お話しできることを楽しみにしております。過去の和解レセプションに参加され、和解に大きく貢献された友人の中には、残念ながら亡くなられた方もいらっしゃいます。この場を借りて、こうした方に敬意を表し、ご遺族やご関係者の皆様に心よりお悔やみ申し上げます。ロンドンでは、今朝は雨、日本でも梅雨という、空も悲しみに暮れているようですが、美しい紫陽花や懐かしいお顔ぶれに、今日は心が癒されることを願っております。

ご存じのように、天皇皇后両陛下は、チャールズ三世国王陛下の御招待により、6月の最終週に英国を御訪問されました。新型コロナウイルス感染症の影響で一度延期されたこの国賓御訪問が、ようやく実現したことをうれしく思います。天皇皇后両陛下による英国への国賓御訪問は、1971年と1988年に続いて今回が3度目となります。今回の国賓御訪問を通じて、両国間の絆が一層深まったことは広く報道され、評価されています。このような歴史的な出来事のわずか2週間後に、和解レセプションを開催できることを、特に嬉しく、また感慨深く感じています。

6月25日にバッキンガム宮殿で開催された晩餐会での国王陛下のおことばを引用させていただきます。「両国のパートナーシップの核となるのは、深い友情です。それは、歴史の教訓、とりわけ暗い時代からの教訓から生まれた、国際ルールや国際機関の重要性に対する相互理解に基づいています。」。

天皇陛下はおことばの中で、「日英両国には、友好関係が損なわれた悲しむべき時期がありましたが、苦難のときを経た後に、私の祖父や父が女王陛下にお招きいただき天皇としてこの地を訪れた際の想いがいかにばかりであったかと感慨深く思います。そして、計り知れぬ努力をもって、両国の未来の友好のために力を尽くしてこられた人々に、皇后と共に深い敬意と感謝の念を表します。」と述べられました。

この集いは、1997年に始まり、今年で27年目を迎えますが、1998年の天皇皇后両陛下による国賓御訪問時に、日本に対する抗議行動があったことも知られています。周知のとおり、和解は決して容易な作業ではありません。このプロセスは、戦争の傷を癒し、平和の中で和解と新たな友情を求めるために行われた数々の重要な草の根活動において、触媒として休むことなく活動してきたボランティアによって進められてきたことを忘れてはなりません。こうした努力を礎として、今、私たちは毎年、英国人と日本人、老いも若きも、友人たちの再会を祝うことができ、古い友情を新たにし、時には新しい友情が生まれ、その教訓を次世代に伝えていくことができるのです。皆さまの日英パートナーシップへのご貢献に改めて感謝申し上げたいと思います。

日英パートナーシップは、民主主義、法の支配、人権の尊重という価値観を共有することで、より強固でダイナミックなものとなっています。また、新たな深刻でグローバルな課題に直面する中、日本と英国が引き続き重要なパートナーとして協力し、解決策を見出していくものと確信しています。昨年、日英両国首相が署名した「広島アコード」に定められた協力の課題は、GCAP（グローバル戦闘航空プログラム）の開始や英国のCPTPP（環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定）への加盟など、日英パートナーシップをさらに強化するものとして順調に進展しています。また、日英間の防衛協力の枠組みである RAA（日英部隊間協力円滑化協定）が発効し、両国の安全保障協力もさらに強化されています。さらに、今年から日本のワーキング・ホリデー制度と英国のユース・モビリティ・スキーム（YMS）が拡大されたことにより、日英両国の若い世代がより幅広い交流を行い、相互理解を深めることができるようになっていきます。

私たちの強いパートナーシップは、個人として共有する信頼によって支えられています。今晚、そして毎回の同窓会において、私たちの信頼がさらに強固なものになることを願っています。

そのような思いから、乾杯の音頭をとらせていただきたいと思います。来年、最も重要であるこの行事において、再会ができますように。それまでの間、皆さまの健康とご多幸をお祈りします。

乾杯！